

# 論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 学 術 ）	氏名	小川 茜
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p>習得及び心理的プレッシャーが協力する2者間の躊躇と衝突に及ぼす影響</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主 査 教授 関矢 寛史</p> <p>審査委員 教授 船瀬 広三</p> <p>審査委員 教授 坂田 桐子</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文は、身体運動スキルを協力して遂行する2者間における失敗行動である躊躇（一般に“お見合い”と表現される）と衝突の生起が習得過程でどのように変化し、また、心理的プレッシャーが負荷された状況でどのように変化するかを実験研究で明らかにしたものである。</p> <p>本論文は5章から成る。第1章では、まず運動課題における対人協応の学習に関する先行研究をレビューした。習得過程を通して対人協応が向上することを示す研究は多々あるが、顕著な失敗行動である躊躇と衝突を実験によって調べた研究はなく、習得と心理的プレッシャーがこれらの失敗行動に及ぼす影響を調べるのが本研究の目的であることを記した。</p> <p>第2章では、2者による協応系列運動課題を用いた実験1及び実験2について記した。実験1では、2者の間に配置した複数のターゲットを順次点灯させ、2者で協力してできる限り早く反応する課題を習得50試行の後、心理的プレッシャー下で遂行させた。習得とプレッシャーの影響が認められなかったため、実験2では習得を80試行に増やした結果、習得過程において躊躇と衝突が減少すること、ならびにその後のプレッシャーテストで躊躇と衝突が増加することが明らかとなった。また、協応の失敗を類型化した結果、5種類の躊躇、1種類の衝突、ならびに7種類の複合パターンに分類された。</p> <p>第3章では、2者による協応離散運動課題を用いて、失敗生起直後の実験参加者の言語報告を質的に分析することで、生起理由を調べた実験3と実験4について記した。両実験では、2者の間に複数のターゲットを3列に配置した。実験3では、点灯したターゲットが2者を結ぶ直線上であるか否か、また、2者からの距離が等距離であるか否かによって、失敗生起率が異なるかを調べた。しかし、それらの要因は影響せず、列によって役割分担を考えたという報告が多かったことから、実験4では刺激呈示の列の影響を調べた。その結果、中央列で失敗行動が増えることが明らかとなった。したがって、列という空間認識の参照枠が用いられ易い条件において、中央列のように役割分担が困難な位置に刺激が呈示されると失敗行動が増えることが明らかになった。また、失敗行動のその他の理由として、無意識的な動作模倣やアクションスリップも存在する可能性が示唆された。</p> <p>第4章では、2者による協応離散運動課題を用いた実験5及び実験6の結果に基づき、習得と心理的プレッシャーが失敗の生起理由に及ぼす影響を明らかにした。両実験では、80試行</p>			

の習得過程において、ペア内で役割分担が進み、課題の反応時間が短縮したうえで躊躇や衝突も減少した。また、衝突しても反応が遅くならない課題であったため、実験5では、心理的プレッシャー下で衝突のみが増加した。そのため実験6では、衝突しないように教示した結果、プレッシャー下で躊躇と衝突の両方が増加した。プレッシャーによって課題に対する注意の処理資源不足が起こり、躊躇と衝突が増加したと考察された。

第5章では、6つの実験の結果に基づき、習得とプレッシャーが躊躇と衝突に及ぼす影響について、思考内容に基づきモデル化を行った。

本研究は協力する2者による躊躇と衝突という失敗行動の生起、ならびにその理由を実験データで示した初の研究であり、研究テーマと分析内容の独創性は高いと言える。また、それらの失敗行動が習得により減少し、プレッシャーにより増加することを明らかにすると共に、2者間の協応を高める多くの方略を示唆する研究として価値があると言える。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。